

平成 28 年度

学生による授業評価

よりよい授業を目指して

報 告 書

平成 29 年 3 月

和洋女子大学

目 次

1. はじめに	1
2. 授業評価実施概要	2
3. 総括	3
(1) 全学授業評価結果の概要	3
(2) 共通総合科目の課題	8
(3) 専門科目の課題	9
付録：授業評価アンケート調査用紙 平成 28(2016)年度	11

1. はじめに

和洋女子大学では学生による授業評価を毎年実施し、授業の点検に評価結果を活用している。教える側と学ぶ側との双方向のやり取りによって授業の質は変化するため、教える側の教員と受け手側の学生との相互関係の密度によって評価が左右される。教員と学生との相性といった流動性のある要因で授業評価が変わることもある。それゆえに授業評価の意味を問われることがあるが、学生の評価が授業の質を読み取る要素の一部分であることに変わりはない。そして継続して評価を繰り返すことで、学生と教員との「一過性の揺らぎ」を排除し、授業の質を測定する指標として授業評価が機能すると考える。

しかし、毎年の評価を行っても評価者は学年進行とともに変わっており、授業の質がどのように改善され、変化したかを純粋に授業評価調査から読み取ることが難しいのが実態でもある。つまり現在の授業評価は評価者が毎回異なる横断的調査でしか実施できない点が授業評価のそのものの限界でもある。そのことを承知の上で授業評価を継続して実施しているのは、授業が第三者の目に触れにくく、閉鎖的な状態で提供される役務サービスだからである。

前回実施した授業評価調査と今年度の調査結果を単純に比較できないが、授業をつかさどる教員が自身の授業を振り返り、点検するための材料として授業評価の意義は高い。実際に自身が担当している授業の評価結果は、自身の授業運営の長所と短所を見出すヒントになっている。たとえば、学生が日常生活の延長で比較的理解しやすい高齢者支援や法人組織についての授業科目は、学生の日常から縁の薄い確率や統計の授業に比べると高い評価が続いている。つまり、学生が馴染みにくい領域についての授業方法に改善の余地があることが結果から読み取れるのである。

授業評価については評価尺度についての問題も残されている。また、授業が完結する前に調査が実施されるため講義終盤に授業全体の理解が完結する授業設計では、評価が出にくいのが実態である。それでもなお授業評価を実施するのは、評価尺度が授業の実態の測定から多少ズレることがあっても、また、授業が完成する前の評価であっても、授業の大半は評価できており、その程度の評価レベルであっても教員の授業点検には十分に有効であることが、多くの教員授業点検作業において明らかになっているからである。

今後の課題としては、授業評価項目の再度の見直しである。項目を見直せば、調査を時系列で評価できなくなることが問題となる。しかし、そもそも評価者も毎回調査ごとに変わらざるを得ないこの調査では、項目の再設計は大きな問題にはならないと考える。授業の実態を測定するにふさわしい調査項目に修正し、教員が自身で授業の点検と改善がしやすい調査を今後も継続して実施し、授業の質の改善を目指すこととしたい。

最後に、全授業ごとの評価を積極的に協力してくれた学生に心から感謝したい。また、調査実施並びに回収分析に関わっていただいた教職員の皆様にも改めてお礼を申し上げます。この調査が更に活用され、和洋女子大学ならではの授業が形成されることを願っている。

和洋女子大学
学長 岸田宏司

2. 授業評価実施概要

授業評価は、前期開設科目については2016年7月9日（土）～7月30日（土）、後期開設科目及び通年開設科目については2017年1月7日（土）～2月4日（土）の期間中に実施した。

2016年度の開設授業科目は、前期653科目、後期656科目、通年126科目、前期集中38科目、後期集中10科目、通年集中80科目で、合計1,563科目である。このうち授業評価対象科目は、佐倉セミナーや教育実習などの学外実習科目、また受講者数20人以下の科目を除いた769科目で、全開講科目の49.2%に相当する。ただしこの対象科目のうち前期3科目、後期7科目が未実施となったため、全開講科目のうち授業評価を実施した割合は48.6%である。

評価は、マークシート方式のアンケートによる評価と自由記述による評価を併用し、各授業科目について両者を学生に記入させ、回収した。

アンケートの設問は付録「授業アンケート」のとおりである。主に教授方法・スキルに関する評価、授業準則・秩序に関する評価、知的刺激や理解度関連達成度に関する評価、主体的学修に関する評価、教員の熱意に関する評価、総合的満足度、学生自身の授業への参加度に関する自己評価などの項目から構成されている。なお、アンケートは5段階評価として設計されている。5は「強くそう思う」（Q15は「3h以上」、Q19は「大変満足」）、4は「そう思う」（Q15は「2～3h未満」、Q19は「やや満足」）、3は「どちらでもない」（Q15は「1～2h未満」）、2は「そう思わない」（Q15は「1h未満」、Q19は「やや不満」）、1は「全くそう思わない」（Q15は「特にしていない」、Q19は「不満」）を意味している。

調査は、実施期間中の各授業の終了時のほぼ15分程度を利用し、原則として授業科目担当教員が用紙を配布し教員が教室を退室した後、記入と回収を学生自身が行なった。

アンケート用紙は、業者に委託して集計し、授業科目ごとの結果は科目担当教員に通知される。各教員は、授業評価の結果を各自で検討し、その感想・今後の授業改善への抱負などについて、全担当科目を総括してA4版1枚に所感を作成した。この文書はネットワークにて教職員が閲覧することができ、学内、相互の授業改善の工夫等を共有している。

3. 総括

(1) 全学授業評価結果の概要

以下に評価結果の全体概要を示すこととする。個々の授業についての評価結果を全体としてまとめたものが[表1]である。

1) 前回調査結果との比較

今回の授業評価アンケートでは実施にあたって前回(平成26年度)の調査実施要領に2つの変更を加えて実施した。1つは質問項目の見直しであり、前回の「Q2. 内容が興味・関心を引いた」と「Q3. 内容が理解できた」とを今回は「Q2. 授業の内容は知的刺激に富んでいた」という1つの質問項目に集約した。もう1つの変更は、調査対象科目を前回の受講者数5人以上から受講者数20人以上の科目として設定したことである。

調査結果では対象科目の履修者数が37879名、回収数も32981名、回収率87%を示し、前回調査の回収率86%とほぼ同じであった。全体的に見ると前回よりも評価値がかなり高くなっている。「Q19. 授業の総合的満足度」が前回の平均評価4.01から4.08へと0.07ポイント上昇したのに加えて、前回よりも評価値が下がった質問項目では「Q13. 積極的に意見や質問をした」が前回の3.32から3.19へ、「Q14. よく出席した」が前回の4.42から4.41へと減少したにとどまり、他の項目はいずれも平均評価が上昇した。

2) 教員の授業運営

①授業の方法・スキル

学生が教員の授業運営と学習指導、とりわけ授業の方法やスキルについてどのように評価しているかに関わる質問項目は、Q4からQ8であり、それぞれの評価平均値を見てみると、「Q4. 教員は学生の反応や理解度を考慮しながら授業を進めた」(評価平均値3.99)、「Q5. 教材が理解に役立った」(4.14)、「Q6. 教員の板書や図の見やすさ」(3.96)、「Q7. 教員の声が聞き取りやすかった」(4.17)、「Q8. 説明がわかりやすかった」(4.05)であり、全体的には評価されているように考えられる。いずれも前回に比べて評価がやや高まっているが、「Q4. 理解度に合わせて授業を進めた」および「Q6. 教員の板書や図の見やすさ」の評価値が相対的に低い。この2つの質問項目では前回も評価値が低かったことに留意する必要がある。

[表1] 授業評価アンケート結果集計表 (全学)

キャンパス	曜日	履修者数	37879名
学部	時間	回収数	32981名
教員	教室	回収率	87%
科目	全体		

項目別回答分布(人数と平均値)

項目	5	4	3	2	1	無回答	全体平均
Q1.シラバスに沿っていた	10402	17928	3728	470	155	298	4.16
Q2.内容は知的刺激に富んでいた	11726	15879	4129	856	280	111	4.15
Q3.新しい知識・技術を学べた	13058	15626	3346	624	205	122	4.24
Q4.理解度に合わせて授業を進めた	10626	14106	5800	1707	580	162	3.99
Q5.教材が理解に役立った	12299	14400	4562	1046	366	308	4.14
Q6.教員の板書や図の見やすさ	10199	13215	5957	1805	590	1215	3.96
Q7.教員の声が聞き取りやすかった	13454	13859	3826	1169	542	131	4.17
Q8.説明がわかりやすかった	11762	13757	5096	1589	635	142	4.05
Q9.質問への対応が適切だった	10914	13779	6413	858	362	655	4.05
Q10.開始・終了時間が適切だった	13276	14701	3641	906	322	135	4.21
Q11.私語に対し適切な対応だった	10779	14355	6116	860	297	574	4.06
Q12.教員の熱意を感じた	13228	14250	4464	635	254	150	4.21
Q13.積極的に意見や質問をした	4256	7627	11313	5001	2702	2082	3.19
Q14.よく出席した	18315	10422	3243	602	123	276	4.41
Q15.予習・復習の時間	2343	3403	5846	5764	11922	3703	2.27
Q16.試験に積極的に取り組んだ	9598	13012	7020	1019	495	1837	3.97
Q17.さらに勉強したくなった	8500	13744	8029	1598	711	399	3.85
Q18.受講を後輩に勧めたい	10603	13043	6963	1118	721	533	3.98
Q19.授業の総合的満足度	11479	14257	5381	960	547	357	4.08

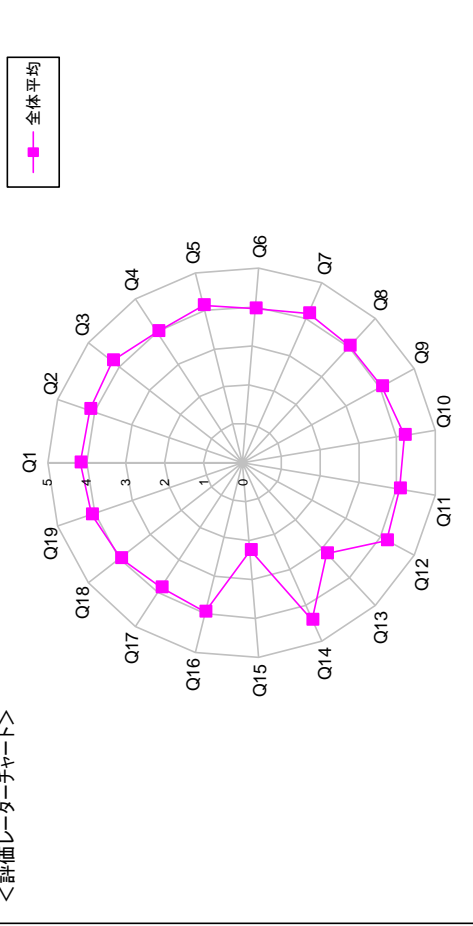
[Q14]で授業への出席率の高い群(5・4)の回答分布

項目	5	4	3	2	1	無回答	平均
Q2.内容は知的刺激に富んでいた	10930	14054	2882	619	200	52	4.22
Q4.理解度に合わせて授業を進めた	9924	12583	4334	1382	430	84	4.05
Q5.教材が理解に役立った	11403	12755	3305	808	255	211	4.20
Q6.教員の板書や図の見やすさ	9487	11818	4537	1450	430	1015	4.03
Q7.教員の声が聞き取りやすかった	12461	12192	2677	925	411	71	4.23
Q8.説明がわかりやすかった	10935	12257	3730	1262	475	78	4.11
Q11.私語に対し適切な対応だった	9991	12809	4595	680	215	447	4.12

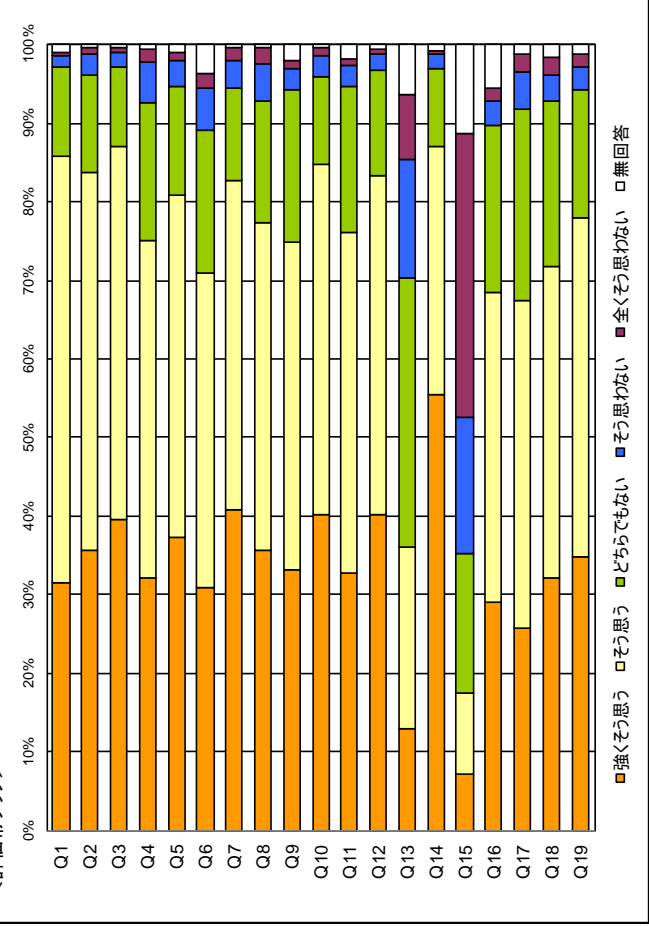
[Q14]で授業への出席率の低い群(3・2・1)の回答分布

項目	5	4	3	2	1	無回答	平均
Q2.内容は知的刺激に富んでいた	716	1718	1220	225	76	13	3.70
Q4.理解度に合わせて授業を進めた	622	1439	1421	318	143	25	3.53
Q5.教材が理解に役立った	805	1552	1227	233	105	46	3.69
Q6.教員の板書や図の見やすさ	641	1309	1381	346	152	139	3.51
Q7.教員の声が聞き取りやすかった	901	1581	1115	236	121	14	3.73
Q8.説明がわかりやすかった	738	1422	1325	319	151	13	3.58
Q11.私語に対し適切な対応だった	706	1464	1477	179	74	68	3.65

<評価レーダーチャート>



<評価帯グラフ>



②授業の進め方

教員の授業の進め方や授業中の教室の秩序維持について学生がどのように評価しているかは、3つの質問項目の評価平均値、すなわち「Q1. シラバスに沿っていた」(4.16)、「Q10. 開始と終了時間が適切だった」(4.21)、「Q11. 私語に対し適切な対応だった」(4.06)からすると、おおむね評価されていると推測できる。なかでも、前回の調査結果についても指摘された、私語に対する適切な対応に関しては、3.96から4.06へと評価値が上昇しており、教員の側における対応の変化が窺える。

③知的刺激

前回の授業評価アンケート結果についての総括においては、「Q4. 新しい知識・技術等を学ぶことができた」の評価値(4.11)に対して、「Q2. 授業の内容は興味・関心を引くものだった」の評価値(4.01)や「Q18. この授業から新たな興味や関心が生まれ、さらに勉強したくなった」の評価値(3.80)が低かったことから、受講者への知的な刺激が不足している傾向にあるのではないかと指摘した。

それを踏まえて、今回の調査では既述したように、「Q2. 内容は知的刺激に富んでいた」と直接的な表現を用いた質問項目を設定した。その結果、知的刺激を受けたことを評価する回答が多かった(4.15)半面で、「Q17. この授業から新たな興味や関心が生まれ、さらに勉強したくなった」の評価値は前回よりやや高くはなったものの、ほぼ同水準(3.85)にとどまった。そのことから、授業中に受けた知的刺激が学習意欲を十分に引き出すまでには至っていないように思われる。

④主体的な学びの促進

大学での学びにおいては学生が自ら学び、考える姿勢を修得することが求められる。しかし、大学のユニバーサル化が進むにつれて、目的意識が希薄で主体的に学ぼうとする学生が少なくなったと指摘されることが多くなった。今回のアンケート調査では受講者の主体的な学びに関連する質問項目と考えられるのは上述した「Q2. 知的刺激に富んでいた」(4.15)、「Q9. 教員は学生の質問、相談に適切に対応した」(4.05)、「Q13. 積極的に意見や質問をした」(3.19)および「Q15. 予習・復習の時間(の長さ)」(2.27)であり、これらの評価値から推測すると、予習・復習の学習時間が前回よりも多くなり、全体として学生の主体的な学びを促したように思われる。とりわけ、授業への出席率の高い学生の間で「Q2. 知的刺激に富んでいた」評価値(4.22)が高く、それが主体的な学びへと結びつきやすいと考えられるのに対して、出席率の低い学生の間ではその評価値(3.70)が低く、主体的な学びにつながっていないように思われる。本学では「きめ細かな指導」を教育の柱のひとつとして掲げ、出欠調査等を通じて欠席がちな学生への指導を継続して行ってきたが、それに加えて、出席率の低い学生への授業内での指導をどのように行うかを検討する必要があるように思われる。

主体的な学びを導く学習環境のひとつの要素として、授業において教員の熱意が受講者に感じられるかどうかがある。担当する教員の熱の入った授業は、受講者にとって強い刺激を与えるものであり、教員にとっても自分の授業を受講する学生の間で「Q12. 教員の熱意が感じられた」かどうかは、最も関心を払わなければならない質問項目であろう。この点で、「Q12. 教員の熱意を感じた」の評価値(4.21)

が高く、さらに前回の評価値（4.11）より高いことから、総じて肯定的な評価が下されていると見なすことができる。

3) 学生の自己評価

前回の総括において、学生自身の自己評価から推測した修学像として、「出席はするが、積極的に質問したりすることはせず、また予習復習をあまりしない」学生像を確認したが、今回の調査結果もほぼ同様の学生の姿を描くことができる。「Q14. よく出席した」（4.41）は、質問項目の中で最も評価値が高いが、一方で「Q15. 予習・復習の時間」（2.27）は少なく、「Q13. 積極的に意見や質問をした」（3.19）り、「Q16. レポートや試験に積極的に取り組んだ」（3.97）の評価値からはあまり積極的に勉学に取り組んだとは言い難い。教員にとっては学生が自ら学ぶための授業の工夫とそれに基づく授業運営の在り方について共同して検討を進める必要があるだろう。

4) 受講者の状況別授業満足度

①受講者数との関係

受講者数と総合的満足度の関係は[表2]のとおりである。この表からわかるとおり、1科目当りの受講者数が多くなるにつれて、受講生の満足度はおおむね低下していく傾向にあることが確認される。ただし、受講人数が50人を超えるとあまりかわらないことも見て取れるため、実際には50人以下のクラスにおいて、少人数になるほど満足度が上がると解釈するのが正確であろう。従来、100人を超えるようなとくに大きいクラスにおいては満足度が低くなると思われていたが、このデータからはそのようなことは断言できない。ただし、受講生が100人以上の科目はそれ以下の科目よりも圧倒的に数が少ないため、同じように比較するのには注意が必要であろう。もっとも、受講人数の多いクラスでは、学生の満足度いかに関わらず、きめの細かい指導ができにくくなることも事実であり、授業における指導の有効性といった観点から見れば、受講者数は少ない方が好ましいといえる。受講者数が50人を超えた場合、むしろクラスサイズそのものよりも、教員の講義内容や教授法によって満足度が左右される方が大きいのではないかと考えられる。

なお、前回の授業アンケート調査（平成26年度）では、「50人以上」と「100人以上」の科目で平均3.9、「150人以上」で4.0であった。それよりは改善されている。また、前回（平成26年度）は「150人以上」が21科目あったが今回は14科目に、また100～150人の科目は46から37科目に減っている。これはクラス分割などの原因によるものであるが、たとえば200人のクラスを2分割して100人のクラスを2つにしても、今回の結果からは効果が期待できるとはいえない。場合によっては、教員の負担が増えるだけの結果になるかもしれない。そうするとデメリットだけが残る結果になりかねない。受講生の満足度が1クラスの受講生数と相関を持つのは、今回の結果からは、50人未満の場合に限られるので、そのサイズにまで分割するのは事実上困難であるといえる。

[表 2] 受講者数と満足度

受講者数	20人～	30人～	50人～	100人～	150人～	合計
科目数	183	310	212	37	14	756
満足度	4.17	4.13	3.99	4.09	4.02	4.08*

*表内各項目は小数第3位以下を四捨五入しているため、各項目の総和は合計の数値と必ずしも一致しない。

②教員の職位・年齢との関係

教員の職位・年齢と満足度との関係は下記[表 3]のとおりである。

[表 3] 職位・年齢と満足度

	教授	准教授	助教*	非常勤	全体
～39歳		4.17	4.11	4.31	4.26
40歳～	4.47	4.22	4.62	4.10	4.19
50歳～	4.19	3.87	4.53	3.94	4.07
60歳～	3.85	4.05		4.03	3.94
全体	3.99	4.12	4.34	4.07	4.08**

*外国人特任講師2名は助教に含む。

**表内各項目は小数第3位以下を四捨五入しているため、各項目の総和は合計の数値と必ずしも一致しない。

年齢との相関でいうと(タテ軸)、年齢が高くなるにしたがって評価は低くなるという相関関係があるといえる。他方、職位との関係でいうと(ヨコ軸)、教授、准教授、助教の順に満足度が高くなっており、非常勤はその中間にある。ただ、職位と年齢をあわせてみると、教授職では年齢が上がるごとに満足度が急激に低くなるのに対して、准教授と助教ではいずれも年齢との相関はみられない。このことから、もちろん教員一人一人の教授スキルや授業内容の違いは影響するものの、全体としてみると、教員の年齢層が高齢層に偏らないように、世代間でのバランスが不可欠であるといえる。

③出席率との関係

全体のアンケート結果を、授業への出席率が高い群と低い群とに分けて集計し、この二群の集計結果を比較できるようにまとめたものが[表 4]である。これをみると、ここで抽出されている質問項目のすべてにわたって、出席率の高い群の方の評価が、低い群の方の評価よりも0.5から0.44ポイント高くなっていることがわかる([表 4]ではその差が大きい方から順に並べてある)。

[表 4] 出席率の高・低二群における各項目の平均値

	出席率が高い	出席率が低い	差 (高いー低い)
Q9. 質問への対応が適切だった	4.01	3.51	0.50
Q3. 新しい知識・技術を学べた	3.92	3.43	0.49
Q5. 教材が理解に役立った	3.96	3.48	0.48
Q6. 教員の板書や図の見やすさ	4.11	3.65	0.46
Q8. 説明がわかりやすかった	4.15	3.71	0.44
Q7. 教員の声が聞き取りやすかった	3.89	3.45	0.44
Q12. 教員の熱意を感じた	4.00	3.56	0.44

なかでも、「Q6. 教員の板書や図の見やすさ」や「Q7. 教員の声が聞き取りやすかった」といった点においても出席率の高低によって有意な差が出ているのは興味深い。教員の板書や声の聞き取りやすさは出席率とは関係なく優劣があるものと思われるが、それにもかかわらず二群の間でこのような差が出ているということは、与えられる授業内容や教授技術のいかにに関わりなく、出席率が高いほど評価を高く、また出席率が低いほど評価を低く付けるというバイアスを示しているように理解できるからである。

また、出席率を問う「Q14. よく出席した」の項目について学類ごとにみると、出席率の高い順に、こども発達学類 (4.68)、健康栄養学類 (4.56)、服飾造形学類 (4.39)、家政福祉学類 (4.31)、国際学類 (4.29)、心理学類 (4.26)、日本文学文化学類 (4.24) となっており、こども発達と健康栄養の2学類が平均 (4.41) を上回っている (つまりこの2学類だけで平均を引き上げている)。

ただし、出席率が高いほど各項目での評価が高いからといって、出席率を上げれば授業の評価、ひいては学生の満足度を上げることになるかということそのようにはどうも判断しがたい。学生の勉学への熱意や目的意識が出席率と授業評価や満足度の両方に作用している可能性が高いからである。いいかえると、出席率の高さと授業評価の高さは、学生の熱意や目的意識を媒介とした「見せかけの相関」にすぎない可能性がある。必ずしも熱意や目的意識の高くない学生に出席を強要しても、それによって学生の授業への評価や満足度が上がるとはいえない。

(2) 共通総合科目の課題

共通科目においてはすべての質問項目において平均値よりも低い数値が出ている。なかでもとくに平均値からの乖離が大きいのは「Q13 積極的に意見や質問をした」(0.3ポイント)「Q15 予習・復習の時間」(0.19ポイント)「Q9. 質問への対応が適切だった」(0.15ポイント)という項目である。

また、共通総合科目の総合的満足度 (Q19. 授業の総合的満足度) は3.99で、全科目の平均と比べ0.09ポイント低くなっている。この差は前回の授業アンケート調査 (平成26年度) の0.04よりも大きくなっているが、この数値自体は前回の3.97であったのに対して今回は0.02ポイント上昇している。

全体的に共通科目の評価が低い理由は二つ考えられる。一つはクラスサイズが大きくなるため、全体としてきめ細かな指導がしづらくなるという理由。もう一つは、各学類の専門領域と異なる分野の授業がほとんどであるため、受講生の関心とそもそも合致しないことが多いという理由である。前者については、前述の受講者数と満足度との関係において、受講者数が多くなるほど満足度が低くなるというデ

一タからも明らかである（[表 2]受講者数と満足度）。また、同じ共通科目でもクラスサイズの小さい語学のクラスとくに英語の授業で全体的に評価が高いことから推測できる（後述）。一方、後者については、明確な証拠が見つけづらい。例えば、受講生の科目内容に対する関心に関わると考えられる「Q2. 内容は知的刺激に富んでいた」という設問ではむしろ平均値からの乖離は小さい方であるし、「Q18. 受講を後輩に勧めたい」という設問も、とくに評価が低いわけではない。このことから考えると、共通総合科目における全体的な評価の低さは、その講義内容や学生の興味関心というよりも、受講生の数が多いことからくる学び方の問題にあると思われる。

共通総合科目の中でも外国語科目だけをみると上記とはかなり異なる様相を呈する。共通総合科目のすべての項目が全科目の平均よりも低い数値が出ているのに対して、外国語科目だけで見ると、全項目のうちおよそ半分（9 項目）で全体の平均を上回っているのである。なかでもとくに全体平均よりも評価が高かったのが、「Q13. 積極的に意見や質問をした」（0.28 ポイント）、「Q15. 予習・復習の時間」（0.14 ポイント）「Q10. 開始・終了時間が適切だった」（0.07 ポイント）で、これに、「Q14. よく出席した」（0.065 ポイント）、「Q11. 私語に対し適切な対応だった」（0.064 ポイント）、「Q9. 質問への対応が適切だった」（0.057 ポイント）が続く。予習・復習（とくに予習）は語学学習に不可欠であることを別にすれば、質問に関する項目（Q13、Q9）や出席に関する項目（Q14）などは、前述のクラスサイズによる影響が大きであろう。ただし外国語に関しては、「Q18. 受講を後輩に勧めたい」（0.13 ポイント）、「Q3. 新しい知識・技術を学べた」（0.12 ポイント）、「Q17. さらに勉強したくなった」（0.10 ポイント）といった項目で全体平均よりも低い値となっており、受講生の興味関心にプラスに影響したかという点とそうともいえない点が懸念材料であるといえる。

以上をまとめると、共通総合科目にとってもっとも大きな問題は、クラスサイズの問題であるといえよう。そもそも、クラスサイズが 100 人を超えると、全体的な満足度が低くなる傾向にあることに加えて、教員の声の聞きやすさや板書に見やすさといった物理的・技術的な問題、受講生の積極的な授業への参加や教員の質問への対応といったいわゆる授業の「きめ細かさ」といった点で、ある程度不可避的なマイナス要素が発生しやすい。総合的満足度はもとより、これらの技術的な諸問題も、かなりの程度、クラスサイズを縮小することで解決できるのではないと思われる。そして実際、前回の授業評価の際と比べて、クラス分割などによって 100 人以上のクラス数は全体として減少し、それが（微増ではあるが）今回の評価向上につながっているのではないと思われる。

ただし、あまりにクラスを分割して同じ科目の授業を増やすことは、教員にとっての負担が増えるだけでなく、すでに飽和状態にある教室数がもはや足りなくなるという問題も抱えている。また、クラスサイズが満足度に対して有意に影響を与えるのは、先述のように、受講生数が 50 人未満の科目であることから考えても、あまりにクラス分割を進めるのも現実的ではない（例えば 200 人のクラスは 2 分割しても効果は期待できず、4 つ以上に分割して 50 人未満にしなければ効果が期待できない）。

これに対して、こうしたクラスサイズの問題を補うためには、板書や音声、受講生の授業参加などは、音声機器の有効活用や教材提示機材の利用、さらにはマナバフォリオやクリッカーなどのデジタル機器および ICT の活用によって対応できると考えられる。今後、そうした機器のいっそうの充実、そして積極的な利用によって、多人数クラスでも学生の評価を改善することができるのではないだろうか。

（3）専門科目の課題

[表 5] は授業の総合的評価に関わると考えられる項目について、学類ごとの評価平均値を示したものである。まず、「Q19. 授業の総合的満足度」の項目について、高い順に学類ごとに並べると、こども発達学類 (4.32)、服飾造形学類 (4.18)、健康栄養学類 (4.12)、国際学類 (4.11) と、ここまでが全体平均 (4.08) より上、続けて、家政福祉学類 (4.06)、日本文学文化学類 (4.02)、心理学類 (3.93) の順になる。この順番は、Q19 と同様、科目の総合的評価に関わる、「Q18. 受講を後輩に勧めたい」でもまったく変わらず、また「Q17. さらに勉強したくなった」でもほとんど変わらない。しかもこうした学類ごとの評価の高さの違いは、これら総合的な評価項目にとどまらず、ほとんどの項目において同じようにみられる。さらにこの学類ごとの評価の序列は、過年度の評価結果でも同じように見られ、固定されているとあってよい。このことから推測できるのは、単に学類ごとにおける授業評価の善し悪しというよりも、学生の目的意識や学類ごとの学びの内容の違いによるバイアスと考えられなくもないということである。

[表 5] 学類ごとにおける授業の総合的評価

学類 (降順)	Q19. 授業の 総合的満足度	Q18. 受講を 後輩に勧めたい	学類 (降順)	Q17. さらに勉強 したくなった
こども発達学類	4.32	4.29	こども発達学類	4.14
服飾造形学類	4.18	4.10	服飾造形学類	3.96
健康栄養学類	4.12	4.05	健康栄養学類	3.95
国際学類	4.11	4.02	国際学類	3.94
全体平均	4.08	3.98	全体平均	3.85
家政福祉学類	4.06	3.93	家政福祉学類	3.78
日本文学文化学類	4.02	3.85	心理学類	3.77
心理学類	3.93	3.82	日本文学文化学類	3.76

総合的評価の上位を占める3つの学類（こども発達、服飾造形、健康栄養）を見てみると、いずれの学類も、その学類における専門の学びが卒業後の進路に直結している点で共通している。またこども発達と健康栄養に関しては、国家資格がその学類の学びの最終目標となっているし、それゆえ、入試選抜においても高い学力が求められる学類である。

このことから考えると、他学類においても、学生の学力が高くなればそれに越したことはないが、それよりも、各学類の学びにおける専門的な内容が、学生の将来の進路にどう関わっているかといった点を意識することが重要であるように思える。それは単に資格取得という目標を置くということではない。上記3学類以外の学類の学生が、実際はほとんど民間企業に就職するという現実を考えると、各学類においてどのような明確なカリキュラムポリシーを設定し、それをもとに、学生の専門的な学びの内容、目的意識、そして卒業後の進路へとシームレスにつながっていくビジョンを明示するかということが、重要な課題となる。各学類における専門科目の学びの内容は様々であろうが、いずれの学類においても、こうしたビジョンの下に授業を構築していく必要があると思われる。

授業評価アンケート

和洋女子大学

このアンケートは授業をより充実させるために実施するものです。回答内容があなたの成績に影響することは一切ありません。
裏面にもアンケートの設問がありますので回答をお願いいたします。

1. 回答欄等のマーク欄は鉛筆・シャープペンシル(HBまたはB)を用いてはっきりと記入してください。
ボールペン、サインペン等は使用しないでください。
2. 訂正は、消しゴムできれいに消し、消しくずを残さないでください。
3. 回答用紙を汚したり、折り曲げたりしないでください。

マーク記入例

良い例	悪い例
<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
<input checked="" type="radio"/>	<input type="radio"/>
	うすい

I. あなたの学年にマークしてください。

1年生 2年生 3年生 4年生 その他(聴講生等)

II. あなたの学類・専修又はコースのいずれか1つにマークしてください。

1年生(新学類)	<input type="radio"/> ① 国際学類	<input type="radio"/> ② 日本文学文化学類	<input type="radio"/> ③ 心理学類	<input type="radio"/> ④ こども発達学類	<input type="radio"/> ⑤ 服飾造形学類
	<input type="radio"/> ⑥ 健康栄養学類	<input type="radio"/> ⑦ 家政福祉学類			
1年生(旧学類)	<input type="radio"/> ⑧ 英語・英文学類	<input type="radio"/> ⑨ 日本文学・文化学類	<input type="radio"/> ⑩ 心理・社会学類	<input type="radio"/> ⑪ 服飾造形学類	<input type="radio"/> ⑫ 健康栄養学類
	<input type="radio"/> ⑬ 生活環境学類				
2年生以上	<input type="radio"/> ⑭ 英文学専修	<input type="radio"/> ⑮ 英語コミュニケーション専修	<input type="radio"/> ⑯ 日文学コース	<input type="radio"/> ⑰ 日本語表現コース	<input type="radio"/> ⑱ 文化芸術コース
	<input type="radio"/> ⑲ 書道コース	<input type="radio"/> ⑲ 国際社会システム専修	<input type="radio"/> ⑲ 心理発達コース	<input type="radio"/> ⑲ こども発達支援コース	<input type="radio"/> ⑲ 服飾造形学専修
	<input type="radio"/> ⑲ 健康栄養学専修	<input type="radio"/> ⑲ 社会福祉コース	<input type="radio"/> ⑲ 生活科学コース		
	<input type="radio"/> ⑲ その他(聴講生等)				

III. この科目について回答してください。

		強くそう思う	そう思う	どちらでもない	そう 思わない	全く 思わない	該当 しない
Q1	授業はシラバス(講義概要)にそって行われていた	⑤	④	③	②	①	①
Q2	授業の内容は知的刺激に富んだものだった	⑤	④	③	②	①	①
Q3	この授業で新しい知識・技術等を学ぶことができた	⑤	④	③	②	①	①
Q4	教員は学生の反応や理解度を考慮しながら授業を進めた	⑤	④	③	②	①	①
Q5	テキストやプリント、画像、実物などが使われ、理解によく役立った	⑤	④	③	②	①	①
Q6	板書の文字や図は見やすかった	⑤	④	③	②	①	①
Q7	教員の話し方、声の大きさは適当で聞き取りやすかった	⑤	④	③	②	①	①
Q8	教員の説明は分かりやすかった	⑤	④	③	②	①	①
Q9	教員は学生の質問、相談に適切に対応した	⑤	④	③	②	①	①
Q10	授業の開始と終了の時間は適切だった	⑤	④	③	②	①	①
Q11	教員は私語に対し適切な対応をしていた	⑤	④	③	②	①	①
Q12	この授業から教員の熱意が感じられた	⑤	④	③	②	①	①
Q13	自分自身もこの授業で積極的に意見や質問をした	⑤	④	③	②	①	①
Q14	この授業はよく出席した	⑤	④	③	②	①	①

裏面に続きます



